
自傷少女と冷静学生

零蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自傷少女と冷静学生

【Nコード】

N2232V

【作者名】

零蒼

【あらすじ】

冷静学生、都渡^{とわたり} 皇^{こう}とその従妹こと自傷少女、雪華^{ゆきはな} 白恋^{はくれ}。

そして、その周辺を取り巻く様々な個性的？な人物たち。

日常に隠れた少しの非日常を送る人々の生活模様・・・を書けたらいいな。

そんなお話。

俺と引っ越し

”都渡 皇”。俺のフルネームだ。

それが、今現在自らが握っている茶封筒の丁度中央でこれでもかと主張している。しかも、様付けで。なんなのだろうかと思ひ少し手首を捻る。

裏面には今度は小さめに”雪華 音羽”と書かれていた。ゆきはな おとばね、さん？だろうか。読めない自分が些か悲しい。いや、それ以前に知らない名前である。周辺にその様な独特の名前があるのであれば取りあえず記憶はしておくだろう。多分。

今度は中身を確認するため茶封筒の口を開く。両面テープで留めていたらしい。うまく剥がれなかった。それを特には気に留めず、中から紙を取り出す。開くとどうやら挟まれていたらしい電車の切符が滑り落ちた。約2枚程。それを手早く拾い上げ、行き先を確認する。

「あ、皇。届いてたの？」

そう言っって背後から母親がひょっこりと顔を覗かせる。30代後半とは思えないその行動に軽く吃驚する。なに？ギャップなの、これ。

「ああ。で、これは何だ？」

「あれ？言わなかったっけ。皇の都会デビュー」てへっ☆

舌を出すな。お前は何がしたいんだ。と、喉元から出そうになったが呑み込む。

「ちなみに、明日だから準備するように！」

「引っ越しだからねえー」と続け、俺に背を向ける。軽く聞きながそうとしたが”引っ越し”という言葉がそれを妨げた。暫し、硬直。言葉を頭の中でリピートする。

「はあ?! ちょっと・・・ええ?!」

声を張り上げ過ぎて、噎せ返しかけた。母親は首だけ振り向き微笑を零しながら口外する。

「反応は遅かったけどリアクションは満点はなまるー！」

「俺はお前の反応に満点はなまるの判子を押してやりたい」

呆れながら眉をひそめ、俺は苦笑する。それに反比例して母親は口角を更に上げた。

「取りあえず、部屋にダンボールがあるからね。あ、あと3日分の着替えと必要なものは鞆に入れといて」

満面の笑みを湛えながら準備の仕方を口頭で伝える。しかし、引越しの意図など俺が最も知りたい事は何も言おうとはしない。

全てを伝え、もう用は無いらしく母親は台所へと歩みを進めた。多分、時間帯からして夕食の準備だろう。俺は仕方無く、階段を上り2つ目の部屋へと向かった。自室である。

扉を開くと確かにダンボールが何枚か重ねてあった。その横にはガムテープが一巻き置いてある。面倒ながらもダンボールを組み立てが仄かにカーテンの間から差し込んでいた。少し眩しい。

ゆっくりとクローゼットへと向かう。まあ、ここからは特に何も無いため割愛しても罰は当たらないだろう。そういうことで色々と割愛。

「皇ー！ご飯だよー！」

下から母親の夕食開始の届けをいただく。丁度、準備が全て終わっているというナイスタイミング。あいつは俺の行動でも見張っているのか、と疑問符が一瞬飛び交ったが無視である。色々と面倒ですからね（棒読み）。

重くなった腰を上げ殺風景へと変容した室内を一瞥しドアノブに手を掛ける。そして何気ない足取りで此处での最後の晚餐を頂戴することにした。

出発当日。というかも俺は電車で揺られていた。

耳には某林檎会社の音楽プレーヤーのイヤホンを挿し込み、自らのお気に入り楽曲をエンドレスで流し続ける。流石に5回目の中盤と

なると只のBGMへと成り変わる。・・・暇だ。

しかしながらこの心躍る感覚は何なのだろうか。遠足の前日に500円以内と定められたお菓子をドキワクしながら買い求める小学生のものと似ているこれは。何処かむずがゆい。

何なら今此処で走り回って取り除きたい。それが駄目なら叫びたい。と、変な衝動に駆られる。あー、動悸がする。

そんな風にうずうずしていると右ポケットの携帯が振動しだす。メールだろうか。それを取り出してディスプレイを一瞥。そこには、“未登録”の文字が整列していた。不信感が湧き上がったもののゆっくりと携帯を起き上がらせる。

『雪華です。駅に迎えに行くので2つ前の駅でメールください』

”雪華”という文字に安堵する。そして今、何番目か確認するため母親から渡されたメモを取り出して開く。今丁度、2つ前だった。

『今、2つ前です。それと、これからお世話になります』

カチカチと基盤を叩き文字列を形成する。そして送信ボタンを押し、画面を一瞥した後携帯を閉じる。ポケットにそれを突っ込み目線を窓へと移動させ、頬杖をつく。てか、何故雪華さんは俺のメアドを知っていたのだろう。疑問がふと浮かんた。

窓の外は俺のいた田舎と違い緑色が少ない。それを見て、都会に來たんだと実感が湧く。まあでも向こうでも無難に生活していくだろう。と、田舎の時の事を思い出しながら思案する。

去年、俺は高校生活の第1歩を踏み出した。・・・取り立て良い思い出は無かったものの。取りあえず無難に平凡を謳歌してきたのである。それはどうでもいいとして。

電車が走行を止め、窓の外の景色が駅のホームへと定まる。腰を上げて足元に置いてあった鞆を携え足を進める。此処で降りる人は少し多く、混んでいた席が空席ばかりへと変容する。改札出るまではこの人混みに流されると思うと頭が痛い。重くなる足を進め、俺はホームへと降り立った。

田舎とは違う土臭くない匂いが鼻を掠める。
それは、少し俺の期待と緊張を煽り、過ぎ去っていく。
これからどうなるんだろうか。俺は。
そうふと思った、高校二年の春休み。

俺と引っ越し（後書き）

どうも、作者こと零蒼ゼロブルーです。

初投稿がこれでいいのか心配ですが・・・まあいつか。
少しでも楽しんで頂けたらなと思います。切実に。
それでは。

従妹と赤色

「都渡・・・皇君、かな？」

改札口を出て人混みから離れようとした瞬間、見ず知らずの女性に話し掛けられた。ついでに右ポケット内の携帯が窮屈そうに振動する。一応、携帯は無視して声の主であろう正面の人物を見据える。そしてこくりと頷いておいた。

「ああ、やっぱり！満琉ちゃんみちると少し似てたからそうかなって思ったの！」

見知らぬ女性が、暴走・・・と、言っているのだろうか。取りあえず、面倒そうなので愛想笑いを少々零させてもらった。

にしても、何故”満琉”という母親の名前をこの人物は知っているのだろうか。俺は少し思案する。まさか、とふと思いそれを確信へと変換するため口外した。

「まさか、雪華さん・・・です「ええ、そうよ」ってまだ話してますが」

おい、最後まで話させろ。と、初対面の雪華さんに言える筈は無く言葉を飲み込む。雪華さんは口角をこれでもかと上げて俺を覗き込む。双眸を素早く開閉するその姿はどこことなく母親に似ている気がした。

「じゃあ、自己紹介しようかな。雪華ゆきはな 音羽おとほ、宜しくね」

「ああ、都渡 皇です。改めてお世話になります」

会釈程度の角度に腰を曲げお辞儀する。雪華さんも腰を軽く曲げお辞儀した。これが雪華さんとのファーストコンタクトである。

駅からタクシーで10分強程で着いた、俺の第2の家と言える雪華家に早速お邪魔させてもらった。内装は新築のように綺麗で隅々まで掃除が行き届いている事が見受けられる。靴を揃え、玄関に置いてあったスリッパを履く。「付いてきてー」と雪華さんが軽く口外

しリビングと思わしき場所に案内された。

「さ、座って座って」

ダイニングテーブルを指差し雪華さんは指示する。俺はそれに速やかに従い、雪華さんの向かい側の椅子に腰を下ろす。鞆は横に置いておく。多分、後で使うだろう。

「皇君。貴方は私の甥っ子よ。そして貴方には従妹がいるわ」

微笑を零しながら雪華さんがカミングアウトした。俺は暫し硬直した後、「はぁ」と苦笑を含みながら返答する。「何その反応、面白くなーい」いや、面白さを求めるな。確かに母親と似ている、この時ふと思ったのは言うまでもない。

「それでね、その従妹に今から会いにいつて来てくれる？」

少し眉に皺を寄せながら雪華さんは俺に伝える。先程とは違う何処か切ない表情に少し俺は困惑する。何かあるのだろうか。ふと思案するが考えつく筈がなく言われるままにその従妹さんに会う事にした。

階段を上り一番奥、と指定された部屋が俺の従妹の自室らしい。その扉が今、目前に控えている。まず、ノックをしよう。一応相手は女らしいし。そう思い扉の丁度中央を2度、軽く人差し指の第2関節で叩く。中からの応答は無い。

「かってに入るぞ」

そういつてドアノブに手を掛ける。しかし、相手は何とも言わず入室を許可しているのか拒否しているのか理解し難い。俺は少し戸惑いながらも扉を開いた。そして驚愕する。

光の束が弧を描く。

そしてそれに映えるように赤色が色を差す。

振り向いた従妹さんは超絶美少女でした。

「ふ、ふえっ・・・うう・・・」

俺を視界に入れ、従妹が驚きの色を表情に混合させる。俺は其処に視線を持っていかず彼女の細く白い腕を凝視した。

先端が赤く染まった小さめのナイフ。それが自らの腕に突き付けら

れている。そこは少し血が滲んでいて自傷行為だと見て取れた。

「おい！止めとけ！」

「あ、あうっ・・・ひいええっ・・・」

従妹に駆け寄りナイフを持った右腕を掴み上げる。日本語になってない言葉を並べ従妹が戸惑う。そしてその間に俺はナイフを奪い取った。

赤い、血。他人のものはあまり見たことは無い。しかしながら快いとは一切、思わなかった。

「取り敢えず、手当てするから。来い」

そう言って掴んだ右腕を引き上げ、立ち上がらせる。扉を出て、足早に階段を下りて行く。従妹は俺の後ろでとてとて、と走る。何とか付いてきてくれるのを一瞥し、そのまま雪華さんがいるであろうリビングの扉を開いた。

「雪華さん、救急箱は何処にありますか？」

「ああ、そこに」

そう口外し、雪華さんがカウンターキッチンを指差す。そこには真っ白の箱が置いてあり、俺はそこに従妹を連れていく。そして、箱を手に取りダイニングテーブルの椅子に従妹を座らせ赤い血の滴る左腕を掴んだ。

雪華さんはその様子を一瞥し、何時も見ているかのような表情をとる。ああ、これは癖なのかとその様子から理解しながら従妹の腕に消毒液を垂らした。

手早くガーゼを引き包帯を巻く。従妹は双眸でそれを見据える。無言の視線を感じながら俺は手当てを終了させ、救急箱を机上に乗せた。

「・・・貴方、誰？」

終了を見届けた後、従妹が開口する。ちゃんと話せるじゃないか、と軽く心内で一喝し彼女が承望した自己紹介を取り敢えず始める。

「都渡 皇。お前の従兄だ」

「いと、こ?・・・ふうん」

お気に召しませんでしたか、すみませんね。と、喉から零れでそうになったが口を噤み外へ出るのを回避する。そして「お前は？」と代わりに口外してやった。

「雪華 ゆきはな 白恋 はくれ・・・」

小さく呟き眉尾を下げる。白恋、か。髪色と似ているな。

「さ、自己紹介したところで夕食のお時間でーす」

先程まで蚊帳の外だった雪華さんが満面の笑みを浮かべながらそう俺と白恋に伝える。俺は鞆が置いてある椅子に向かい、その時にカウンターに置かれていた料理をテーブルの机上乘せた。白恋も同じようにお皿を運び、並べていく。

こうして、俺は雪華家にて初めての食事を戴くこととなった。

・・・これからの生活は大丈夫だろうか。

雪華家にお邪魔した初日、ふと心配に思った。

従妹と赤色（後書き）

どうも、第2話です。

にしても、これからどうなるか私にもわからないです。
でも面白くなればいいなあ。

それでは、また。

星好き少女と情報少女

翌日。光の筋の眩さが俺を起床へと追い込み、午前6時13分に目覚める事となった。未だに重たい瞼は開かれる事を拒み反抗期へと突入する。しかし、眩しい。そのため、起床する事を余儀無くされる。さ、起きよう。とここで、欠伸を1つ落とす。

本日、俺は転校生となる。そう、これから2年程通う高校へと初登校をするのである。と、まあ格好付けてみたが正直・・・面倒臭い。「皇くーん！朝ご飯を置いとくから、食べといて」

「分かりました」

階段を降りる際、目前を走り去る雪華さんとい音羽さんと軽く会話を交える。何故、名前で呼んでいるのか経緯を説明すると音羽さんが昨夜の夕食時に『雪華さん』『・・・はあ』『何ですか』『雪華さんって他人行儀よねー。これから家族なのに』『詰まり、名前で呼べと』『いえーすっ！じゃなきゃ音羽たん反応しないぞ！』きらっ☆『あっそうですか』イラッ。と、こういう感じである。流石にあの時は愛想笑いをする事すらも億劫に成り下がった。

足を一定のリズムで進め昨夜、夕食を頂戴したりビングへと馳せ参じる。それと同時に玄関で音羽さんの奏でるヒールの甲高いが外へと呑み込まれていった。そういえば、あの人の仕事は何だろう。今夜、質疑してやろう。と、少し思案し扉のドアノブに手を掛けた。

「あ、みやこわたり。おはよう」

「とわたり、だ。従兄の名前くらい覚えろ」

ダイニングテーブルに並べられた皿の上のフレンチトーストをフォークに突き刺した状態で白恋が挨拶込みの失礼を俺に投げ掛ける。それを軽く訂正し、一喝してやる。白恋は無表情のまま聞き流し、フレンチトーストを頬張った。小さな口をもきゅもきゅと動作させているのを一瞥し、向かい側の椅子を引く。

目前にあるのは白恋が口に行っている物と同様の音羽さん作と思わし

き朝食である。フレンチトーストと脇にはプチトマトとレタスが無造作に置かれ自らの位置を確定させている。そしてその皿とは別に小さな皿がもう一つ。その上には梨が二欠片置いてあった。実家よりも豪勢な朝食にすこし吃驚したと共に母親がどれだけ手を抜いていたのか明らかになる。今度、電話してやろう。勿論クレームをつける為に。

「皇、7時10分」

「ああ。んじゃ、頂きます」

白恋の時間宣告に応答し、口外する。そして朝食を頂戴する事に行動を移行した。

どうもブレザーは暑苦しい。そう思ったのは職員室で担任教師と話を交えていた時である。新調された制服は前の物とは違い学ランではない。そのため着慣れていないのか少しそのような思案へと到達した。

「じゃあ、ホームルームの時に紹介するから黒板に名前書いて自己紹介をお願いするよ」「あ、はい」「まあ、そんなに緊張しなくていいよ」「・・・善処します」と、軽い指導を受け早速お世話になる教室へと案内をしてもらった。あ、首もとキツイ。やっぱりかっちりと着るのは止めよう。と、ふと思案しネクタイを緩めた。

「はい、みんなおはよう」

教室前方の引き戸を勢い良く開き、教師が声を張り上げる。俺は廊下に立ち止まり、その様子を傍観者気取りで見据えた。ざわつく教室内は立ち話をしている生徒の率が多く、座席に着いているのはごく少数派だった。「はい、席に着け」と、教師による指導が行われ生徒達はしぶしぶ着席していった。

それから、割愛するが俺は自己紹介を予定通り行った。無難に名前と前の学校名を口外し指定された席へと向かう。あ、今何人かと目が合った。

その後、特になんという事もなくことごとく詰まらない話を聞かさ

れ本日の学業が終了。放課後となる。

「やあやあ。転校生こと都渡君」

「今の所、このクラスでイケメンだけど近寄りがたい人、都渡皇」
鞆を机上に着地させた瞬間、見知らぬ女子生徒（2名）に良く分からん会話の始球を投げつけられた。「・・・は？」「どうやら都渡君は現状を把握出来ていないようだぞ、みこっちゃん」「確かに。私達のこの行動の意図を理解する確率、ほぼ0%だったしね」「・・・おい」「みこっちゃん、流石。せーらは全然分かんかったよ」
話しかけておいて俺は完全スルーか。と、話に取り残された俺は心の内で悪態を吐く。

「さて、それは置いといて」置いとくんかい。「改めて自己紹介するさあ」何処の方言だ。・・・はあ、突っ込む自分が何故か悲しい。
「せーらは」小鳥遊^{たかなし} 星楽^{せいら}”。せいらって漢字は星を楽しむと書きまーすっ」

「よろぴくりんり！」と、小鳥遊さんは続け軽くカールの入った長髪をふわりと舞い上がらせる。でこを隠すように7・3の割合で分けられた前髪を留める大きめの星がそれと同時に光を受け止め、打ち返す。なんというか、何処かのモデルさんの様である。と、彼女に対する感想は此処まで。

「私は”藤乃^{ふじの} 美琴^{みこと}”。16歳、AB型。ここまで言ったの初めてかもしれない」

左手に小さめのノートパソコンを抱え右手で眼鏡を正すクールビューティー、というのが今の藤乃さんに似合う言葉だろう。高めに結い上げられたポニーテールが動作する度に揺れ動く。にしても、綺麗な髪だな。

「知っての通り、都渡皇だ。転校生のな」

そう、口外し会話を形成させる。2人は顔を見合わせて「これから宜しく」と、俺に答えの二重奏を送り付ける。「ああ」と、それに淡泊ながらも応答し帰路に着くため教室を後にした。

始まりの鐘が鳴り響く。
 ．．．．．
 全てを包み込むように。

星好き少女と情報少女（後書き）

これにてプロローグは終わりです。
さあ・・・これからどうしようか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2232v/>

自傷少女と冷静学生

2011年10月9日00時50分発行